

<導入>

一昨晚、金曜の夜は中秋の名月でした。夜空に浮かぶ満月をご覧になりましたか。仕事でいきづまったり、人間関係で思い煩っていると、いつの間にか視線が下に向き、或いは、内向きになって、光を見失ってしまうことがあります。ですから、目を高く上げて月や星を眺め、創造者なる神に思いを馳せるのは良いですね。イザヤ 40:26 に「あなたがたは目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方はその万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つも漏れるものはない。」とあります。目を高く上げることで、天の万象をその名で呼び出される神様がおられる。そのお方は私にも目を止め、名前を呼んでくださる。そう思うと、くよくよしている原因も小さなことのように思われ、閉ざされた心に光が差し、開かれて、心にゆとりが生まれます。

<転移>

今日も教団の信仰告白、教憲第1条、第5項を最初にみんなで読みましょう。週報裏をご覧ください。

5. 主イエス・キリストは、父なる神のひとり子であって、聖霊によって宿り、処女マリヤより生まれたまことの神にしてまことの人である。主は我らに代わって十字架にかかり、死んで葬られ、よみにくだり、三日目に死者の中からよみがえり、我らのために贖いを成し遂げ、我らに永遠のいのちを与えた。主は天に昇り、父なる神の右の座に着き、大祭司として今も我らのために執り成している。

<本論>

イエス様が十字架に死んで三日目に復活されたのなら、イエス様は今どこにおられて、何をしておられるのかという疑問を持つ人もいることと思います。それについて、聖書の証言を簡潔にまとめたのが、信仰告白第5項の3節です。もう一度、その文だけを読みます。

「主は天に昇り、父なる神の右の座に着き、大祭司として今も我らのために執り成している。」

## I. 昇天し神の右に着座されたキリスト

イエス・キリストは十字架に死んで罪の贖いを成し遂げ、復活されてから 40 日間何度も使徒たちを初め多くの弟子たちに現わされた後、弟子たちの見ている目の前で天に昇られました。イエス・キリストの昇天です。そのことをヘブル 4:14 では「もろもろの天を通られた神の子イエス」と言っています。

他の箇所を見ると、ルカ 24:51 には、「そして、祝福しながら彼らから離れて行き、天に上げられた」とあります。また、使徒 1:9~11 では、「イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった」と書かれています。使徒たちが天を見つめていると、白い衣を着た二人の人が彼らのそばに立って、彼らにこう言いました。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げているのですか。あなた方を離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」再臨の預言をしたのですが、9~11 節のたった 3 節の中でイエス様が天に「上げられた」とか、「上っていく」ということを、4 回も繰り返すことで、昇天の事実を強調しているのです。

念のために押さえておきますと、この時イエス様が上られた天とは雲がたなびく大空や、月星太陽のある宇宙空間と言う意味ではありません。聖書にそのような意味で天と表現している箇所はたくさんありますが、イエス様が昇天された「天」は聖書が語るもう一つの意味、自然界のどこかの場所ではなく、「超自然的な世界、見えない神的世界」を指しています。自然界が創造される前から神の子イエスが父なる神とともにおられた聖なる世界です。キリストは昇天した後、父なる神の御許に行き、父なる神の右の座に着かれと他のみことばは記しています。例えば、マルコ 16:19 は、「主イエスは彼らに語った後、天に上げられ、神の右の座に着かれた」とし、ヘブル 1:3 は「…御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。」と書いています。

新聖書辞典によれば、「右または右手は一般的には力、権威を表

すものとして旧約聖書に引用されている。特に詩篇に多く、王的神的な力、支配を表している」と説明されています。ですから、昇天されたイエス・キリストは、神の右の座に着かれることで、神の力や権威を持つ者となられたのです。

ところで、キリストの昇天が事実であるとしても、何故それほどに強調しなければならないのでしょうか。その理由をイエス様は最後の晩餐の時のメッセージの中で語っておられます。ヨハネ 16:7

7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。

イエス様はもう一人の助け主、真理の御霊、聖霊を父なる神の元から弟子たちに遣わすためには、彼らの許を去って天に行き、父なる神の御許に行かなければならないと言っておられたのです。そして、そのことばの通りに、イエス・キリストは昇天されて後の10日目、ペンテコステの日に祈って待っていた弟子たちに聖霊を送りました。聖霊を受けた弟子たちは様々な国のことばでイエス・キリストの福音を証したことが使徒2章から分かります。

聖霊を受けた弟子たちはキリストの証人となり、その人格もキリストに似た者へと大きく変えられて行きます。キリストの昇天無くして、聖霊の降臨なく、聖霊の降臨なくして教会の誕生も後の教会の発展と世界に与えた様々な影響もなかったことを思うと、キリストが昇天して神の右の座に着かれたことは、後の教会と世界の歴史を大きく作り替える驚くべき奇跡、個人的に見れば、私たちも含めて後にキリスト者となったすべての人々にとっても、なくてはならない大きな出来事だったのですね。

その恵みの大きさを覚えると、ヘブル 4:14 の勧めの通り、「私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。」

## II. 大祭司として今も我らのために執り成しているキリスト

キリストが大祭司としての務めを果たしておられることについては新約聖書の他の手紙にも書かれていますが、キリストを直接「大祭司」と呼んでいるのはヘブル書だけです。しかも 11 回も繰り返し出て来るのは、律法に定められた大祭司との比較において、キリストが如何に偉大な大祭司であるかを語っているためでしょう。

この箇所では、私たちの偉大な大祭司の二つの異なる性格に焦点を当てて、二つの勧めをしています。

### 1. 昇天された偉大な大祭司である神の子イエス(14)

律法の定めによれば、神の幕屋、或いは神殿は聖所とその奥にある至聖所の二つの部分に分かれていました。祭司たちは聖所に入って務めを果たしましたが、至聖所に入ることができたのは大祭司だけでした。大祭司も一年に一度だけしか入れません。しかも、入る時には必ず自分の罪のためと民が知らずに犯した罪のために献げる血を携えなければなりません。そのようにして仕える幕屋、或いは神殿は、モーセが山で示された型通りに設営された者でした。つまり、それは本体ではなく、本体の型どおりに作られた模型にすぎないのです。

これに対して、神の子キリストが「もろもろの天を通」って入られたのは模型ではなく、本体である天の幕屋、父なる神のおられるところでした。その時キリストが携えて行かれたのは入るたびに何度も繰り返し献げなければならない不完全な動物の血ではなく、罪の赦しのために罪のないご自身が十字架で流された、ただ一度だけで完成された完全な血でした。

イエス・キリストが十字架上で贖いのみわざを完成されたとき、聖所と至聖所を仕切る「神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた」とマルコ 15:38 が記録したのは、正にキリストが偉大な大祭司として父なる神の御許、天に上げられて、罪人との間にあった隔ての幕がキリストによって完全に、永久に取り除かれたことを示すしるしだったのです。

「ヘブル語で大祭司のことを『コヘン・ガドル』と言う。それは『それは偉大な祭司』という意味」(新聖書註解)だそうです。ですから、「偉

大な大祭司」とは、「偉大な、偉大な祭司」という意味になりますね。イエス・キリストはそのように、律法の定める大祭司をはるかに越えた、超越的な大祭司、正に神の子だから、信仰の告白を固く保とうではないかと、14 節で呼びかけ勧めているのです。

2. 罪を犯すこと以外のすべての点で、私たちと同じように試みにあい、私たちの弱さに同情できる私たちの大祭司(15、16)としての性格です。

先々週も見たように、霊的な存在として永遠の昔からおられた神の御子のご自分の民を救うために天から声をかけて教え導くだけではありませんでした。私たちと同じ肉体を取って人間となって来てくださり、罪は犯されませんでした。私たちと同じようにサタンの誘惑にも遭い、私たちが経験する様々な試練や苦しみ、周囲の人々からの賞賛と非難攻撃、親兄弟たちの無理解と断絶、飢えや渇き、死の痛みや苦しみさえも味わわれました。ですから、ヘブル 4:15 にある通り、「私たちの**大祭司**は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。」

「ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか(16)」と勧めているのです。

私は、学生の頃に信仰を持ち救われた喜びを頂きましたが、いつの頃でしょうか、社会に起こる様々な犯罪や事件、キリスト者として抱える苦悩などを思う時、天に昇られたイエス様は今何をしておられるのだろうと疑問に思ったことがありました。

そんな時に示されたのが、ローマ 8:34 のみことばでした。

34 だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていただくのです。

イエス様は今も生きておられて、神の右の座に着いて、私たちのためにとりなしていただくのだと知ったとき、かかっていた霧が晴れて目の前が明るくなったような感じがしたことでした。

私たちの弱さに同情できる私たちの偉大な大祭司神の子イエスさ

まが今も私たちのためにとりなしていただきます。イエス・キリストのとりなしの祈りに支えられて今の私たちがあります。試練の中にあるとしても、悲しみの中にあるとしても、私たちの偉大な大祭司神の子イエス様は見放すことなくとりなしていただきます。お委ねして、大らかな広い心で自分にできること、神様から託された務めに今日も、今週も励んでまいりましょう。

お祈りします。

父なる神様。御子イエス様が私たちの罪の贖いを十字架と復活で成し遂げ、今は昇天され、神の右の座に着いて私たちのためにとりなしていただくことを感謝いたします。

私たちの偉大な大祭司神の子イエス様のご愛と聖なる御心にお委ねして今週も神様から託された務めに励んでまいりますので、助け導いて、神様の御用にお用いください。愛する兄弟姉妹たち、家族や友人たちお一人おひとりを守り祝福してください。

主の御名によってお祈りいたします。

ヘブ:ル 4:14~16

14 さて、私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な**大祭司**がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。

15 私たちの**大祭司**は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした。すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。

16 ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。